

Claude Panaccio,  
*Ockham on Concepts*,  
 Ashgate, 2004, pp. 197+x1.

周 藤 多 紀

本書は、1990年代初頭に、それまでのオッカム研究の潮流を劇的に変えるオッカム解釈を提出した、フランス語圏カナダを代表するオッカム研究者（現ケベック大学モントリオール校教授）であるクロード・パナチオの最新作である。パナチオはこれまでにフランス語によるオッカムの研究書 *Les mots, les concepts et les choses. La sémantique de Guillaume d'Occam et le nominalisme d'aujourd'hui* (Bellarmine-Vrin, 1992), プラトンからオッカムまでの「心的語り」の概念史研究 *Le discours intérieur. De Platon à Guillaume d'Ockham* (Seuil, 1999) 他、フランス語と英語で数多くの論文を出版している。1992年の研究書の表題にも伺われるように、パナチオは中世哲学の研究者でありながら、現代の言語哲学、心の哲学、認知科学にも強い関心を寄せている。この最新作でも、パナチオは、しばしば自身のオッカム解釈の解説をフレーゲ、ラッセル、パトナム、フォードら——本書の表題には Jerry Fodor, *Concepts: Where Cognitive Science Went Wrong* (Clarendon Press, 1998) が意識されているに違いない——との相違点ないしは相似点に言及しながら展開している。こうした論述の方法には、オッカム研究者以外の現代の読者にも興味深い研究を提供しようという彼の意図が見てとられる。

本書全体は九章から構成されている。第一章「直観、抽象と心的言語」。第二章「知性の活動 (intellectual acts)」。第三章「記号としての概念」。第四章「心的言語における併意語 (connotative term)」。第五章「名称的定義 (nominal definition) の役割」。第六章「認識と併意 (connotation)」。第七章「類似 (similitudo) としての概念」。第八章「論理的概念」。第九章「言葉の意味」。このうち第四章から第六章にかけて、オッカム研究の潮流を劇的に変えた1990年の論文“Connotative Terms in

Ockham's Mental Language” 以来のパナチオのオッカム解釈が展開、弁護されているので、パナチオのオッカム研究の重要性を確認するためにも、まずこの部分について解説しておきたい。

オッカムは、アリストテレス『命題論』とポエティウス『命題論注解』の伝統とアウグスティヌス『三位一体論』の「内的語り」の伝統を受け、「書き言葉」、「話し言葉」、「知性の中の言葉」の三種類の言葉が存在すると主張している（『大論理学』第一章）。スペードに代表されるパナチオ以前の解釈の潮流は、これら三種類の言葉のうち、「知性の中の言葉」つまり「心的言語」には単純な（＝非命題的な）併意語は存在しないというものであった。こうした結論が引き出されるには、三つの事項(1)～(3)が前提されていると考えられる（同書p.69）。

- (1) すべての併意語は「名称的定義」を持つ。
- (2) 名称的定義を有する語は名称的定義と同義である。
- (3) 心的言語には同義語が存在しない。
- (4) 「心的言語」においては、併意語とその定義は区別されたものとして存在することができない。

パナチオによれば、前提(1)と前提(3)はオッカムの著作において明らかであるが、オッカムの考えとして前提(2)を主張するのは誤っており、したがって、期待されているような結論(4)は引き出されえない。つまり、併意語はその名称的定義に還元され、その名称的定義だけが心的言語に存在するというにはならない。併意語とその名称的定義は同義ではないが、併意語を含む命題と、併意語をその名称的定義に置き換えた命題の真理値は同一であると言える。名称的定義の役割は、あらゆる語の意味を単意語か共範疇語の意味に還元するという「意味論的還元主義」の一翼を担うことではなく、併意語が表示する（signify）ものを明らかにすることで、実体と性質以外のものは存在する必要がないという「存在論的コミットメント」を示すことにある。

パナチオの指摘を受け、スペードらはオッカムが心的言語に併意語を認めることを承認するが、この点においてオッカムは誤りを犯したのだと主張する。それに対して、パナチオはこれをオッカムの誤りと考える必然性はないとする。スペードらの解釈の背後には「心的言語」はその使用者にとって透明な「理想的な論理言語」であるべきだというオッカムのテキストに根拠を持たない仮定がある。心的言語に併意語を認めることは、心的言語に意味論的階層性と不透明性をもたらすが、オッカムがそもそも

意味論的還元主義と無縁ならば、その事自体は何ら問題にならない。またその場合、スピードが提起した、併意語の概念はいかに獲得されるかという認識論の問題もクリアできる。併意語の概念を獲得するのに先立って、その名称的定義を構成する単意語の概念を獲得している必要はない。我々は二つ以上のものを認識した時（例えば「黒い馬」と「黒い犬」）、その二つの関係づけによって、心の内に併意語（「黒いもの」と単意語（「黒さ」「馬」「犬」）の概念を形成する。こうした一連のパナチオの説明は、デカルト以降の我々の「心」のはたらしきについての思い込みを排し、オッカム自身の「併意語」「単意語」「名称的定義」をめぐる諸発言を救おうとするもので、説得的であるように思われる。

その他の章においてもパナチオは、オッカム研究上の論争点、難問に関して斬新な解釈を提出している。残りの紙面では、その中でも、日本のオッカム研究（清水哲郎氏の『オッカムの言語哲学』、稲垣良典氏の『抽象と直観』及び渋谷克美氏の『オッカム「大論理学」の研究』）によっても取り上げられてきた「フィクトゥム、スペキエスの排除」に関するパナチオの解釈（本書第二章）を紹介しておきたい。

オッカムは、その前期著作において概念をフィクトゥム (fictum) と同定しながら、後期にはそれを否定し、概念=心的活動 (mental act) 説へ転向したことはよく知られている。この転向については、彼の同僚であったチャトンなどの論争の影響が取りざたされると共に、それだけでは説明として不十分であるとも考えられている。この点についてパナチオは、「一つの心的活動はその終局として唯一の対象をもつ必要はない」ことに気づいたことが転向の重大なポイントであり、「類的概念は多数の個物の記号である」という初期著作『オルディナチオ』で既に提出された考えがその転向に大きく寄与したに違いないと言う。心的活動の対象に関する上述の前提がなくなれば、普遍認識という心的活動の対象として「フィクトゥム」を想定する必要はなくなり、その結果、オッカムは「より少ないものによって生じることが、より多いものによって生じることは無駄だ」という「剃刀」でもってフィクトゥムを切り捨てたのである。

オッカムによるスペキエス論の拒絶は、このような「フィクトゥム」説の放棄の経緯とは異なり、徹頭徹尾「剃刀」の原理による。オッカムは、スペキエスの眼目を「知性認識作用の前提条件として必要とされるもの」と「正しく」理解していた。知性認識作用は、個物の認識のみならず普遍の認識においても、スペキエスをその前提

条件として必要としない。抽象を説明するには作用 (acts) と習性 (habits) のみで十分である。したがって、スペキエスは存在すべきではない(「剃刀」の適用)。

フィクトゥムもスペキエスも認識主体と認識対象の間に認識成立のために必要とされる「第三のもの」であり、それらの存在の拒絶は、多くのオッカム研究者によって「反表象主義」を意図・含意するものだと解説されてきた。しかしパナチオによれば、一連の認識論上の転向の動機・含意は「反表象主義」ではない。オッカムは確かに「我々の認識の直接の対象は事物の心的イメージである」という意味での「表象主義」は採っていないが、一種の「表象主義」の立場を支持している。「自然的記号」たる概念と同定される心的活動は、認識主体である知性とも認識対象である個物とも區別される「第三のもの」であり、それによって認識対象が認識主体の前にもたらされるような「意味論的表象」である。

オッカムの認識論をめぐるパナチオの解釈には様々な反論が予想されるであろう。私自身は、転向の契機が「一つの心的活動はその終局として唯一の対象をもつ」というテーゼの放棄にあるとする点、オッカムがトマスのスペキエスを「正しく」理解していたというコメントには疑問を感じる。しかし、ここでもパナチオが、従来の解釈者達とは異なる刺激的なオッカム像を提示していることは確かであろう。

最近十五年のパナチオのオッカム解釈史上における重大な貢献を反映し、本書については、すでにアメリカ哲学会(2006年4月シカゴ)をはじめ、北米でいくつかの書評(会)が持たれているようである。そのうちのいくつかについては、インターネット上<sup>1)</sup>でも公表されている。

## 注

- 1) [http://individual.utoronto.ca/pking/index.html/Presentations/Ockham\\_On\\_Concepts/pdf](http://individual.utoronto.ca/pking/index.html/Presentations/Ockham_On_Concepts/pdf) (Peter King 評) <http://www.fordham.edu/gsas/phil/klima/files/Toronto.pdf> (Gyula Klima 評)

本書評は平成十七年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。